

静岡県函南町における方言漢字「函」の研究

岡 墻 裕 剛

A Study of a Dialect Character ‘函’ at Kannami town, Shizuoka

OKAGAKI Hiroataka

1. はじめに

「函」は、「カン、ゲン、ゴン」などの音読みを持ち、「はこ、いれる、よろい」などの訓読みがある漢字である。代表的な訓である「函」（はこ）は、書誌学関係においてやや専門的な立場とニュアンスで使用されるが、一般には同訓の常用漢字である「箱」と表記することが多い。熟語としては、郵便物をポストに入れることを表す「投函」（トウカン）、北海道の有名な港町「函館」（はこだて）での使用がほとんどであって、『日本国語大辞典』第二版（2001）¹に見られる「函人」「潜函」「函数」（「関数」とも表記）などの他の熟語は、どれもあまり目にするものではない。

地名に関しては、青森と函館を意味する「青函」（セイカン）、箱根山を意味する「函嶺」（カンレイ）、その南を指す静岡県「函南」（カンナミ）町などがあり、こちらは該当地において局所的な高頻度での使用を確認できる。しかし、地名や固有名詞としての頻度・知名度は「常用漢字表」（2010年内閣告示）の改定の際には考慮されなかったため、総合的な使用頻度の低さや造語力の弱さのために「函」は現行の常用漢字には含まれていない。

笹原（2013）²は、地名に使用される地域に根ざした漢字を「方言漢字」と呼び、北海道小樽市「銭函」（ぜにばこ）と函南町での「函」についての報告がある。それによると両地域では、「函」とその異体字である「函」、両者の中間的な「函」の使用が確認されている。また、『康熙字典』において「函」の見出し字と注文とで字体が異なること、「涵」が「了」字体で示されることを指摘し、「函」の字体使用が安定しないことについての言及がある。

しかし、笹原（2013）は「方言漢字」全般についての著書であって、「函」字を専門的に扱った内容ではない。そこで本研究では、笹原（2013）の視点を継承しつつ、函南町における方言漢字「函」についての調査をより掘り下げて行うものとする。

2. 字書類における「函」

前述のとおり、「函」は現代の「常用漢字表」（2010）には含まれていないため、字体の明確な規範

を求めにくいですが、2000年12月国語審議会答申の「表外漢字字体表」が参考にできる。同表は、「常用漢字とともに使われることが比較的多いと考えられる表外漢字（1022字）」について、その印刷標準字体を示すものである。しかし、現行の「常用漢字表」の改定前のものであり、「表外漢字」の適用範囲も未だ有効であるかはやや不明確ではあるが、同表では右の図1の「函」が確認できる。

139	カン	串		
140	カン	旱		
141	カン	函		
142	カン	咸		
143	カン	姦		

図1 「表外漢字字体表」

活字のバリエーションを知るための資料としては、『明朝体活字字形一覧』（1999）³が有効である。「函」と、「函」を部分字体として含む「涵」について画像を示す。

部 首	通光版 1831年	(1) 五車翻牌 1820年	(2) 永光老会 1844年	(3) 英華書院 1860年	(4) 英華書院 1873年	(5) 国文五号 1887年	(6) 国文四号 1887年	(7) 監地二号 1892年	(8) 監地五号 1894年	(9) 監地七号 1903年	(10) 監地二号 1906年	(11) 大版三号 1912年	(12) 大版二号 1912年	(13) 大版一号 1912年	(14) 監地五号 1913年	(15) 監地四号 1913年	(16) 博文四号 1914年	(17) 博文二号 1916年	(18) 博文一号 1916年	(19) 秀光一号 1926年	(20) 秀光二号 1926年	(21) 秀光三号 1926年	(22) 秀光四号 1926年	(23) 秀光五号 1926年	修訂版 1986年	
	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函	函
	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵	涵

図2 『明朝体活字字形一覧』

『明朝体活字字形一覧』は、そもそも表外字の字体の異同を把握するために作成されたものであり、表外字の字体以外にも「函」や「函」といった字体の揺れが確認できる。

図2の右端にもあるが、『大漢和辞典』⁴を確認すると、「函」は図3のようにこの字体が見出しとなっている。一方、同じ部分字体をもつ「涵」は「了」字体となっており、字体の揺れを確認できる。小篆と解説中の「函」の字体が一致しているだけに、両者の部分字体の相違が不自然に感じられる。また、「函」は「函」の俗字とされ、参照見出しとなっている。



図3 「大漢和辞典」

次に、『康熙字典』⁵における「函」と「涵」を確認すると、図4のとおりであった。「函」は見出し字としては「函」字体で書かれるが、注文では「函」字体になっており、同一文献内でもテキストのレベルの違いによって揺れがある。「涵」は見出し字も注文も「了」とする字体ではあるが、中の点の向きが異なる「涵」字体となっている。「涵」と「涵」は一見すると大きく異なるように見えるが、実のところ点の向きがやや違うだけであって、両者の相違は字体レベルではなく字形デザインの差程度のものとも捉えられる。このように考えると、『大漢和辞典』において確認された「函」と「涵」の「了」部分の字体差は、『康熙字典』の記述を踏襲したものである可能性が指摘できる。

唐代の字書である『干祿字書』⁶では、「函」と思われる漢字は、図5のように「了」と「人」を二回書く字体が通字、「了」と「臼」と書く「函」が正字とされている。通字の字体も外形上は大きく異なる字体であるような印象を受けるが、「从」の字体は4点のバリエーションとも考えることができ、左の「人」の点画の向きと接触位置を少し変更すると「函」になる。これも実のところ『康熙字典』における「涵」と同様に、字体上は「函」に類似していると言える。

鎌倉時代の字書である観智院本『類聚名義抄』⁷では、「函」と「涵」は図6のようであった。「函」は部首番号120番の雜部に配属され、分類上は「臼」の下に配置されている。一つ目の記述では、「函」が通字、「了」が「臼」を貫く字体が正字とあり、続く記述は「函函 谷非/マタラカニ」とあり、「函函はともに俗字だが、函はマタラカニに非ず」という弁字であろうか。参考までに該当しそうな「マダラカニ」を併置する。「涵」は右上が「ソ」のようになった「涵」字体が正字であり、他3体の俗字が示されている。「涵」には「臼」字体は存在しない。

明治時代に作られた、各時代の様々な文献における漢字の篆隸楷行草の字体を示した『五體字類』⁸において「函」と「涵」は、「函」「函」「函」「函」形が確認できるが、明確に「函」と書くものはない。いずれの字体も「了」であり、伝統的には「函」は「了」形のみが使用されてきたことが分かる。

このように見ると、むしろ「函」字体が『康熙字典』の見出し字として採用されたこと自体が、歴史的な変遷にそぐわない判断であったように感じられる。一定しない字体使用は、現代の問題ではなく、これまでの歴史的な背景の下に行われてきたことが分かる。



図4 『康熙字典』

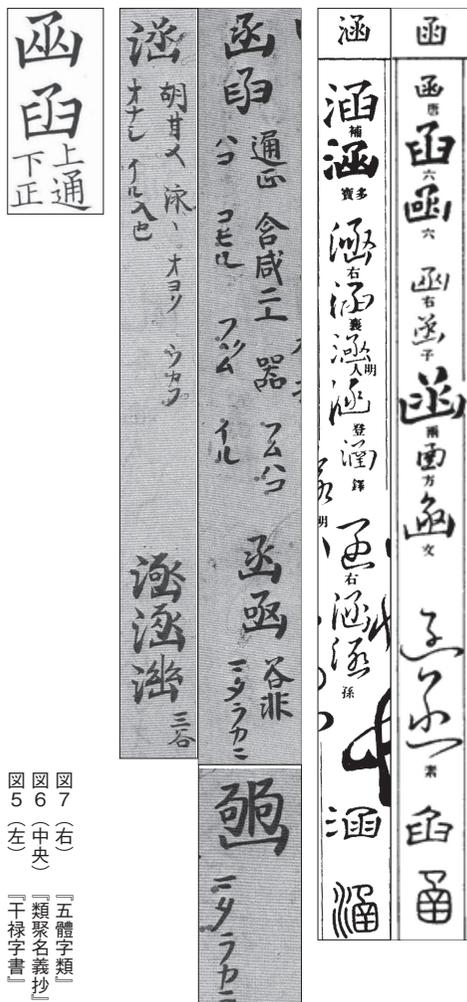


図5 (左)
図6 (中央)
図7 (右)

『五體字類』
『類聚名義抄』
『干祿字書』

3. 「函」の使用状況の調査

3.1. 函南町について

函南町は静岡県の東部、伊豆半島の付け根に位置し、東に熱海市、西に三島市・清水町・沼津市、南に伊豆の国市、北に神奈川県箱根町が存在する。近隣の市町村合併による変動のために現在は一町で田方郡を構成しており、函南町のウェブサイト⁹によると、人口は平成28年10月末で日本人外国人合わせて38,390人である。

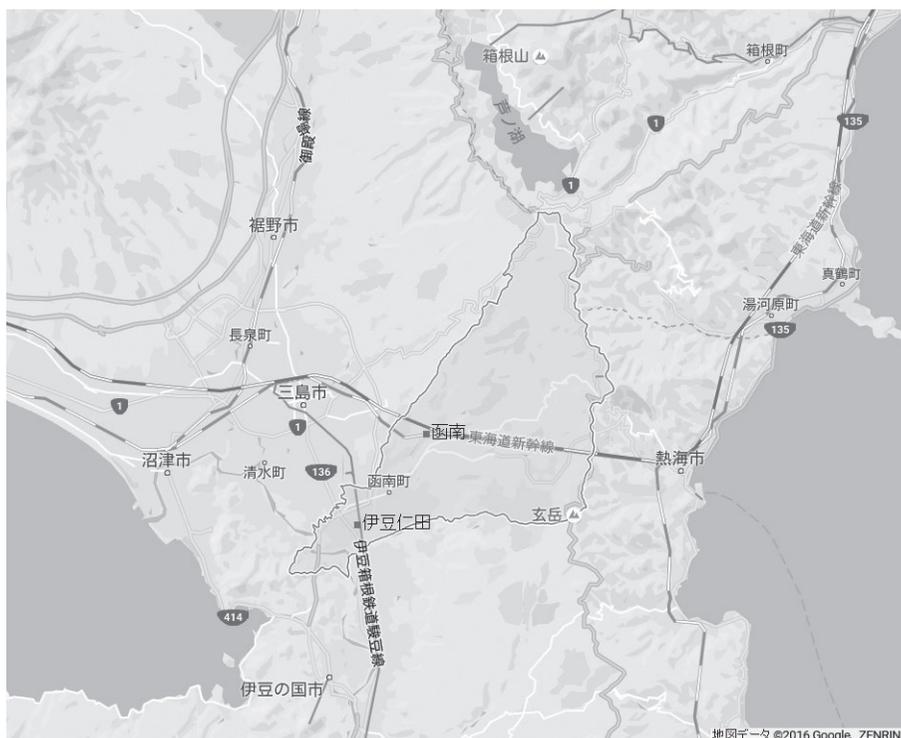


図8 函南町の位置関係 (Google Mapに駅名を追加)

『函南町誌』¹⁰によると、函南町は1963年（昭和38）の町制実施により誕生し、それまでは「かんなむら」と呼ばれていた。町名の漢字について確かな資料は存在しないが、函嶺（箱根の異称）の南に位置することに由来するとのことである。

ちなみに、函館の由来は、『日本国語大辞典』第二版（2001）の「はこだて【函館】」の解説に「戦国時代、領主河野政道が築いた館の形が箱に似ているところから呼ばれたと伝えられる。箱館と書かれていたが、明治二年（一八六九）箱館戦争後、現在の表記に改められた」とあり、「箱」から「函」へと変更されたものであることが分かる。どちらの地名ももともとは「箱」とも関連があったが、現在の地名としては「函」のみが定着したことになる。

函南町においては、「函南」を「かんなん」・「かんなみ」のどちらで読むかという問題と、「函」の表記が問題となっていたらしく、『函南町誌』に次の記述が確認できる。

「函南」の「函」という文字も、最初は「函」または「函」という文字が日常使用文字としてずいぶん使われていた。それを、町制実施に際して、「函」・「函」は、「函」の俗字だから使わないように広報「函南」を通してよびかけ、以後、町の刊行物を利用しては「函南」の「函」を使うよう積極的に働きかけて今日にいたっている。

しかし、上中下3巻からなるこの町誌では、収録された文書、案内図、看板といった歴史的資料の写真に、「函」とともに多数の「函」・「函」の使用例が確認でき、表表紙と背表紙(図9)に手書きされた題字にさえ「函」が存在する。この題字は当時の町長による揮毫で、上巻は田中和雄町長、中・下巻は中村博夫町長が行ったと見返しに明記されている。中・下巻の字体の揺れは同一人物によるものであり、下巻の題字の際に意識的に改められたことが読み取れる。

また、昭和44年に制定された町章のデザインには「丸は平和を示し、垂直、水平線は厳しさを物語るもので、いつも活動は厳しさを伴う。これを和でつないで一字の中に明るい町を表現した」と解説があるが、外形上は「函」字をシンボル化したもののように見える。

2013年6月に函南町で調査を行った際、町役場で「函」字について聞き取りを行った。厚生部住民課の戸籍住民係の方との面談によって、次のことが判明した。

- ・役場で用意している書類は、「函南町」より下の住所のみを書くものがほとんどであって、字体の揺れが窓口で問題になることはほぼない。
- ・「函」と「函」に関しては、指摘されれば目にすると思うが、あまり意識したことがなく、旧字だとは思いますが、誤りであるという認識はない。
- ・ただし、「函」や「函」のように書かれたものが提出された場合、許可をとった上で「函」として登録する。
- ・企業名や団体名の届け出は「函」がほとんどだが、「函南ゴルフ倶楽部」のように「函」を用いる場合もある。「函」は「函」で登録する。
- ・以前、住民票を見たやや年配の住人から、「函」は自分が習った字体（「函」と思われる）と異なっているため修正してほしいと依頼があった。

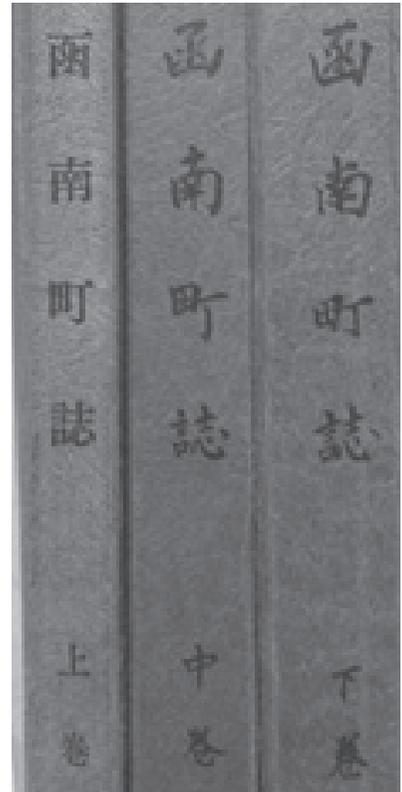


図9 「函南町誌」背表紙



図10 函南町の町章

つまり、町内部では字体の揺れは大きな問題とはなっておらず、印刷で最も普通に用いられる「函」を基準とし、その変種として「函」「函」をゆるやかに許容しているようである。

3.2. 函南町での景観調査

景観文字とは、言語景観調査の一環として文字の字体を研究対象とする場合に用いられる概念であり、2006年と2012年の京都祇園で「祇」字種を調査した當山（2013）¹¹では、「紙でもなく、デジタルでもない、非文献資料」、つまり「バス停の文字・駅の名称・商店の商品の看板・ポスターなど」における文字とされる。前掲の笹原（2013）は、まさにこの景観文字の研究であり、本文の記述から函南町での調査はJR函南駅周辺で実施したと推測される。

函南町には、東海道新幹線に沿って中央部を東西に走るJR東海道本線の函南駅と、西部の一部を通る伊豆箱根鉄道駿豆線の伊豆仁田駅という交通の要衝があり（図8参照）、函南駅は1934年（昭和9）開業、伊豆仁田駅は1922年（大正11）開業とともに歴史が古い。しかし、どちらかと言えば函南駅周辺はあまり拓けておらず、市街地は伊豆仁田駅のある南西方面に広がっている。そのため、本稿では主に南西エリアでの調査を中心とした。

まずは、調査によって確認できた「函」の字体を図11に掲載する。調査は、2013年6月に南西エリアを散策し、特徴的な看板類をピックアップしたもので、当該地域における全数調査ではない。それぞれの画像の詳細は次のとおりである。

- ① 「函南町立函南小学校」 小学校の校門の看板
- ② 「函南小中」 靴商店の立て看板
- ③ 「函南東中・函中」 靴商店の張り紙
- ④ 「函南町仁田」 自動販売機の住所標示
- ⑤ 「函南製材所」 案内図
- ⑥ 「函南製材所」 製材所の看板
- ⑦ 「熱函入口」 パチンコ店の誘導看板
- ⑧ 「熱函入口」 寿司店の箸袋

* 「熱函」：熱海市と函南町を結ぶ熱函道路

一番多く確認できたのが、「函」であり、この字体は現在の一般的な活字字体であるため、看板やプレートの文字に印刷・手書きを問わず無数に存在した。数が多く全てを掲載できないが、①②のように看板と手書き文字でも確認できた。

続いて「函」は、少数ながら確認でき、③～⑦のようなものがあった。⑤と⑥は同じ製材所名ではあるが、「材」や「所」が別字体なのに対し、「函」は共通の字体である。しかし、⑤は縦棒が湾曲しているのに対し⑥は真っ直ぐ下ろされてハネもないという違いがある。離れた場所にあり、文字の特徴も異なるので別人の筆であろう。⑦はネオン管による文字であるため、1・2画目が省略されて接合されたとも考えられるが、1文字目の「熱」の作り込みからすると、意図的な作字の工作かとも思われる。

注目したいのは、②と③である。これらは同一店舗内ですぐ近くに配置されたものであったが、字

体が異なっていた。「南」の2画目や他の字の左払いの長さなどから別人の筆だと思われるが、字体の違いによる混乱や問題は起こらないようである。

最後の「函」は、調査エリアでは景観文字としては見つけることができず、寿司店の箸袋に1例あったのみである。店員に字体が「函」ではないことを質問したが、「こう書くこともある」との回答だった。寿司店ならではのこだわりといったところだろうか。



図11 景観調査の結果

①の函南小学校については、同校のウェブサイト¹²に「校長室には、2枚の書が掲げられ、訪れた方々の関心を引くものとなっています。明治8年に寄贈された三条実美公による書と明治13年の伊藤博文公による書です。」とあり、この2枚の画像を確認できる。

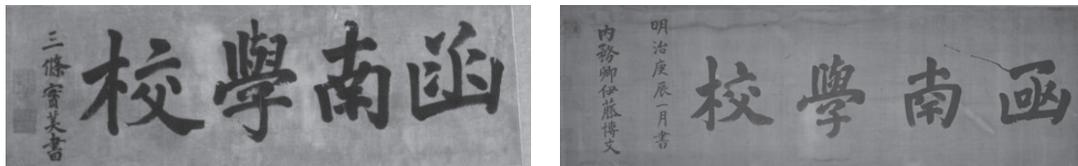


図12 三条実美（左）と伊藤博文（右）の書

三条実美（1837-1891）と伊藤博文（1841-1909）はともに幕末・明治時代の政治家であり、明治8年（1875）と明治13年（1880）当時は、政府の高官であった。比較的短い期間にこの2書が揮毫された理由は不明だが、初画が「ソ」のように離れているが三条書は「函」、伊藤書は「函」の字体である。個人の字体認識の違いではあるが、京都の公家・山口の武士という両者のそれぞれの出身と生育の環境が、このような差に結びついたのかもしれない。

また、同サイトで確認できる同校の校章は、町章と同じく「函」がベースとなつたと見られる。一所であっても「函」「函」「函」の字体がそれぞれ使用されており、その柔軟な字体使用は町役場での聞き取り結果を裏付ける証拠と言える。



図13 函南小の校章

3.3. 中学生の書き取り調査

続いて、手書きの際に「函」の字体の揺れがどの程度出現するのか、函南町立函南東中学校3年生を対象に調査を実施した。調査は、同中学を卒業し当時常葉大学4年生であった教育実習生に稿者が依頼し、中学校での指導教員の許可と協力の下2013年6月18・19日に行われた。調査は漢字テストのような書き取り形式で、調査用紙は次のとおりである。

漢字調査	
次のひらがなを漢字に直してください。	
1. めいれい	<input type="text"/>
2. かなみ	<input type="text"/>
3. こころ	<input type="text"/>
4. たけ	<input type="text"/>
5. にじゅっさい	<input type="text"/>
6. ほっきょく	<input type="text"/>
ご協力ありがとうございました。	

調査前には、「これから行うのは漢字についての簡単な調査です。テストではないので、間違っ

もかまいませんし、もし分からないところがあれば空欄のままでかまいません。名前も書かなくて結構です。気を楽に回答してください。ただし、字はなるべく丁寧に書いてください。」との指示を行った。

基本的には「2. 函南」の調査が目的であったが、意識がこの設問のみに集中しないように他の問題を加えた。他の漢字としては、手書き（教科書体）と活字に見た目上の差異があるものを選び、字体選好に一定の傾向があるかどうかの確認を意図した。特に「6.北極」は、笹原（2013）で「函」のように「了」形の「函」を書く者は似た構成要素を有する「極」でも「了」形を書く傾向がある、との指摘がある漢字である。

調査の有効回答数は140件であった。「3. 心」と「4. 竹」には、特に目立つ特徴は見られなかったので省略することにし、他の4題について顕著な字体の揺れが確認できた「2. 函」、「6. 極」、「1. 令」、「5. 歳」の字体数を示す。なお、表内の記号類の意味はそれぞれ、「×」は完全な字種の誤りと判断したもの、「空白」は無回答、「<>」は字体の提示が難しいので部分字体の特徴を別字を用いて表現したものを意味する。

表1 漢字の書き取り調査

2. 函	
函	94
函	45
函	1
合計	140

6. 極	
極	115
<了>	20
<函>	2
×	2
空白	1
合計	140

1. 令	
令	91
令	47
×	1
空白	1
合計	140

5. 歳	
歳	67
才	43
<示>	22
<臣>	4
<火>	1
<小>	1
×	2
合計	140

まずは本研究の主眼である「2. 函」であるが、「函」「函」「函」の順に使用され、別字種を書いた回答はなかった。景観調査による主観的な使用頻度の印象と同じ結果である。「函」が全体の67%と最も多いが、「函」も32%という無視できない比率を示す。現地では3人に1人という頻度で「函」を使用することになる。

「函」は1例しかなかったが、この例は図14の上のように「了」ではなく1画目と2画目を離して書く「函」のような形となっていた。これは「函」の影響かと思われる。また、中には一度「函」と書いて「函」に書き直した図14の下のような例が数件あった。「函」が誤りである（少なくとも書き取りでは好ましくない）という判断に基づくと推測されるが、「函」ではなく「了」形の「函」が選好されることには、「函」の形が影響を与えているのは明白である。

さらに、結果には含んでいないが、調査時に「漢字調査実施情報票」として実施者・実施日・実施対象・実施人数等の記入を依頼し

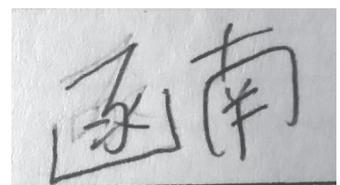
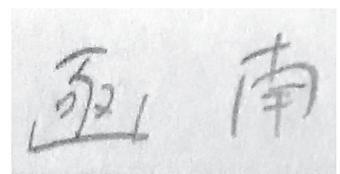


図14 手書きの「函」

たところ、実施者である中学校教員による手書き文字が「函南東中学校」となっていた。3ヶ所全てで同じ字体であったため、この教員の意識としては、「函」が手書きの標準字体として定着していることが読み取れる。普段から文字を意識している国語教員にこのような傾向が見られるのは興味深い。

続いて「6. 極」であるが、「極」が全体の82%と大勢を占めるが、右上が「了」形も14%存在する。また、図15のような旁が「函」形のもの2例(1.4%)確認できた。どちらも乱雑な印象を受ける書きぶりだが、うち1例は「2. 函」で「函」と書いた回答者と同じであり、この字体は「函」の影響で実現されたと思われる。



笹原(2013)の指摘に従って「函」と「極」における「了」形の関係性を調査すると、「6. 極」を「了」形で書いた20人のうち、「2. 函」を「函」と書いたのは18人に及んだ。類似した部分字体により、普段目にする「函」が、教育漢字である「極」の実現形にも影響を与えたと考えられ、方言漢字の影響力を知ることができる。

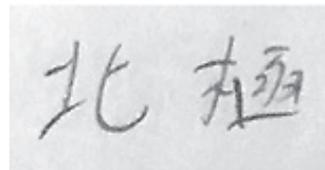


図15 手書きの「極」

本研究の主旨から少し離れるが、他の2題についても確認しておく。

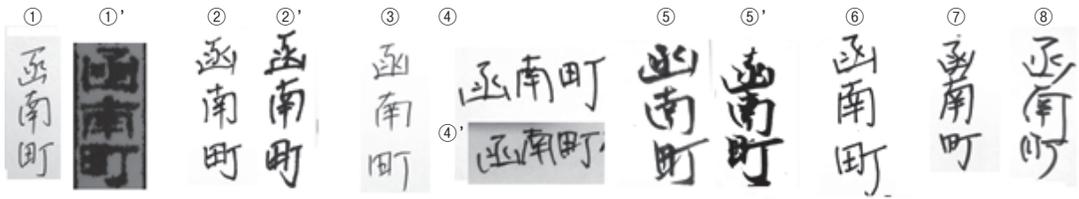
「1. 令」は、教科書体「令」(65%)、活字体「令」(34%)であり、「令」も日常生活でよく目にする字体なので選好されやすい。「2. 函」と似た比率となったが、教育される字体と日常の接触字体の関係性は、2:1くらいの割合で落ち着くのかもかもしれない。

「5. 歳」は常用漢字ではあるが、「函」と同様に小学校で学習する教育漢字には含まれていない。やや複雑な造形のためか、正答率は48%と半数を下回り、部分字体の誤りも多かった。「示」部分を「示」とするものが16%、「歳」の影響なのか「臣」とするものが3%存在した。また、代用字「才」の使用も31%と高く、自信がなかったのか「歳」を「才」に書き直した回答もあった。「歳」は中学1・2年で学習するので、調査対象である中学3年生では習得済みであるはずだが、上記の調査結果からは定着しづらい漢字であると指摘できる。日常生活でも代用字「才」で済ませることが多い字種だが、この漢字の習得のためには積極的に「歳」を用いた方がよいだろう。

3.4. 年賀状の調査

函南町在住の常葉大学の学生の協力を得て、2016年の年賀状の宛名を確認することができた。調査できたのが34通と多くはないが、差出人の所在地に従って、函南町内、函南町以外の静岡県内、静岡県外の3タイプに分類して図16に掲載する。[1] 函南町内のダッシュ付きの数字は、差出人の住所欄に書かれた文字を意味する。

[1] 函南町内



[2] 静岡県内



[3] 静岡県外

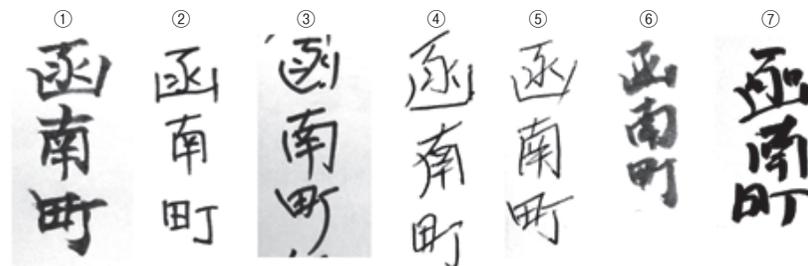


図16 年賀状調査の結果

- [1] 函南町内：「函」と「函」の割合がほぼ同じで「函」は1例のみである。①「函」と①'「函」、⑤「函」と⑤'「函」のように、宛名と自分の住所とで字体が異なるものが確認される。①'は住所印であるため、あえて変字を行っているようにも思える。
- [2] 静岡県内：「函」が半数を占め最も多く、「函」と「函」が拮抗している。函南町外の間が「函」を好む傾向があることを示すが、日常の接触頻度の観点からは説明が付きにくい。県内ニュースや天気予報で目にする「函」をうろ覚えで書いた結果の誤りだろうか。
- [3] 静岡県外：ほとんどが「函」で、②と⑥は「函」にも見えるが判断が難しい。「函」という活字体が好まれるのは、県内者とは違い日常的に目にする機会があまりないので、宛先をよく確認

して書いたからか。⑦は「函」形だが、1画目と2画目が離れており、右部分が「口」に見える曖昧な字体である。

本節では年賀状の宛名の「函」を確認したが、やはり収集数が少ないため一定の傾向を読み取ることが難しかった。ただし、県外者には活字字体「函」が多いことから、日常的な接触頻度が少なく普段目にしづらい字体は、やはり実現されにくいと言えるだろう。

なお、宛名書きの際には、差出人からの過年度の年賀状の字体を見本にすることも考えられるが、差出人本人の手書き文字を確認できなかったため、この点について今回は検証できなかった。

4. まとめ

以上、本稿では「函」の変遷を確認しつつ、函南町における方言漢字としての観点から、景観文字・手書き文字の調査を行った。字種としての「函」は、伝統的にはあまり安定した字体運用がされてこなかったが、近代活字以降は「函」字体が一定の規準となっている。景観文字と手書き文字の調査からは、「函」字体は現代の代表的な活字体ではないというだけで、函南町では極めて一般的に使用され、定着もしていることが明らかとなった。この理由としては、「函」に対して目立ちやすい異体字である「函」の存在が影響しており、この字体を忌避することで中間的な「函」字体が実現されやすくなるのではないかと推測される。また、「極」の旁を「函」のように書いてしまう例からも、日常的に接触頻度の高い字体が個人の字体認識に与える影響の強さを伺い知ることができた。

宛名の調査からは、函南町だけではなく近隣の市町村においても「函」が普及している可能性が指摘できるが、「極」の「了」字体と同様に全国的に存在する類いの単なるケアレスミスである可能性も否定できない。今後、周辺地域やあるいは函館市において、慎重な追加調査が必要である。

本研究において、「函」の字体のバリエーションは、地域の日常に深く根ざした方言漢字として広く受け容れられていることが分かった。デジタル化が進む現代ではあるが、このような景観や手書き文字の中に伝統的な字体が残っており、ほとんど意識されることはないが、だからこそかえって失われずに伝承され続けるのであろう。

- 1 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第二版（2001）、小学館
- 2 笹原宏之（2013）『方言漢字』、角川学芸出版
- 3 文化庁文化部国語課編（1999）『明朝体活字字形一覧 1820年～1946年』、大蔵省印刷局
- 4 諸橋轍次（1989-1990）『大漢和辞典』修訂第2版
- 5 東京大学東洋文化研究所蔵清朝版『御製康熙字典』（内府本、パーソナルメディア株式会社による電子データ）
- 6 杉本つとむ編（1975）『異体字研究資料集成』別巻1
- 7 天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編（1976）『類聚名義抄』観智院本、仏・法・僧
- 8 法書會編（1937）『五體字類』増補11版、西東書房
- 9 「函南町ホームページ」（2016年11月6日閲覧）

<http://www.town.kannami.shizuoka.jp/gyosei/machinoinjinko/konzengetsu-jinko.html>

- 10 函南町誌編集委員会編『函南町誌』上中下（1974-1985）、函南町

- 11 當山日出夫(2013)「景観文字研究のころみー「祇園」の経年変化を事例としてー」,高田智和・横山詔一『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』彩流社
- 12 「函南町立函南小学校」(2016年11月6日閲覧) http://www.kannamishou.com/?page_id=23
<http://www.wbs.ne.jp/cmt/kanshou/enkaku.html>

キーワード：漢字, 異体字, 活字体, 手書き